

オホーツク海の網走沖で観察された鯨類と海鳥

宇仁 義和¹・小山 香菜¹・中郡 翔太郎²・前田 光彦³

1. 099-2493 網走市八坂 196, 東京農業大学オホーツクキャンパス 2. 080-8555 帯広市稲田町西 2 線 11 番地, 帯広畜産大学 3. 093-0051 網走市北 1 条東 2 丁目, 前田漁業部チパシリ

Sighting Records of Cetaceans and Sea Birds in the Southern Okhotsk Sea, off Abashiri, Hokkaido

UNI Yoshikazu¹, KOYAMA Kana¹, NAKAGUN Shotaro² & MAEDA Mitsuhiko³

1. Tokyo University of Agriculture, 196 Yasaka, Abashiri, Hokkaido 099-2943, Japan. ✉ unisan@m5.dion.ne.jp 2. Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine, W2-11 Inada-chō, Obihiro, Hokkaido 080-8555, Japan 3. Maeda Fishery “Chipashir,” N1E2 Abashiri, Hokkaido 093-0051, Japan

We carried out a vessel-based sighting survey with a whale watching boat in the southern Okhotsk Sea between late April and October, 2012 and 2013, off Abashiri, Hokkaido. Eight species in four families of cetaceans were recorded: *Balaenoptera physalus*, *B. acutorostrata*, *Berardius bairdii*, undescribed Ziphiidae sp., *Orcinus orca*, *Lagenorhynchus obliquidens*, *Phocoenoides dalli*, and *Phocoena phocoena*. A school of undescribed Ziphiidae was sighted in July, and several large schools of more than a hundred of *L. obliquidens* were observed frequently in August and September. The sighting rates per passage in 2012 of *B. acutorostrata*, *L. obliquidens*, and *P. dalli* were 38.5%, 19.2%, and 76.9% in July; 47.1%, 32.4%, and 88.2% in August; and 28.6%, 52.4%, and 33.3% in September, respectively. The sighting rates of the whole cetacean species were 88.5% in July, 94.1% in August, and 81.0% in September. The sighted sea birds in the seven objective families—Gaviidae, Alcidae, Procellariidae, Hydrobatidae, Stercorariidae, and Phalaropodidae—were 19 species, including rare birds in Japan, such as *Phoebastria albatrus*, *Cepphus carbo*, *Lunda cirrhata*, and *Sterna aleutica*.

はじめに

オホーツク海に面した北海道の網走では、2010年9月から自然観察船の運航事業「あばしりネイチャークルーズ」が始まった。当初は小型のイルカ突棒漁船をそのまま利用していたが、2012年4月からは船室付きの小型観察船「チパシリ」が導入された。同年夏からは、東京農業大学オホーツクキャンパスの有志でつくるグループ「農大ANC」（ANCは Abashiri Nature Cruise の略）の学生や著者らのうち宇仁、小山、中郡が乗船し、鯨類と海鳥類の目視調査を行なった。本稿では、知床半島に比較して報告がほとんど見られない網走沿岸のオホーツク海での鯨類や海鳥類に関する船上観察記録について報告する。

なお、オホーツク海は根室海峡を含む海域を指

す名称であるが、本稿では便宜的に根室海峡を除いて使用している。これは本稿での観察範囲が網走沿岸であることや鯨類の回遊状況の違いから、結果を知床半島をはさんだ根室海峡と対比させて考察するためである。

方法

1. 観察方法

あばしりネイチャークルーズは、網走川の河口に近い道の駅「流水街道網走」を起点に鯨類や海鳥類などの観察を目的とした自然観察船を運航している。チパシリは喫水線長 10.45 m、5 t 未満の船室付きの観察船で、以前は知床半島で自然観察船として使われていた。運行回数は1日2回、出航時間は4月は08:30と14:00、5–8月は08:30と15:00、

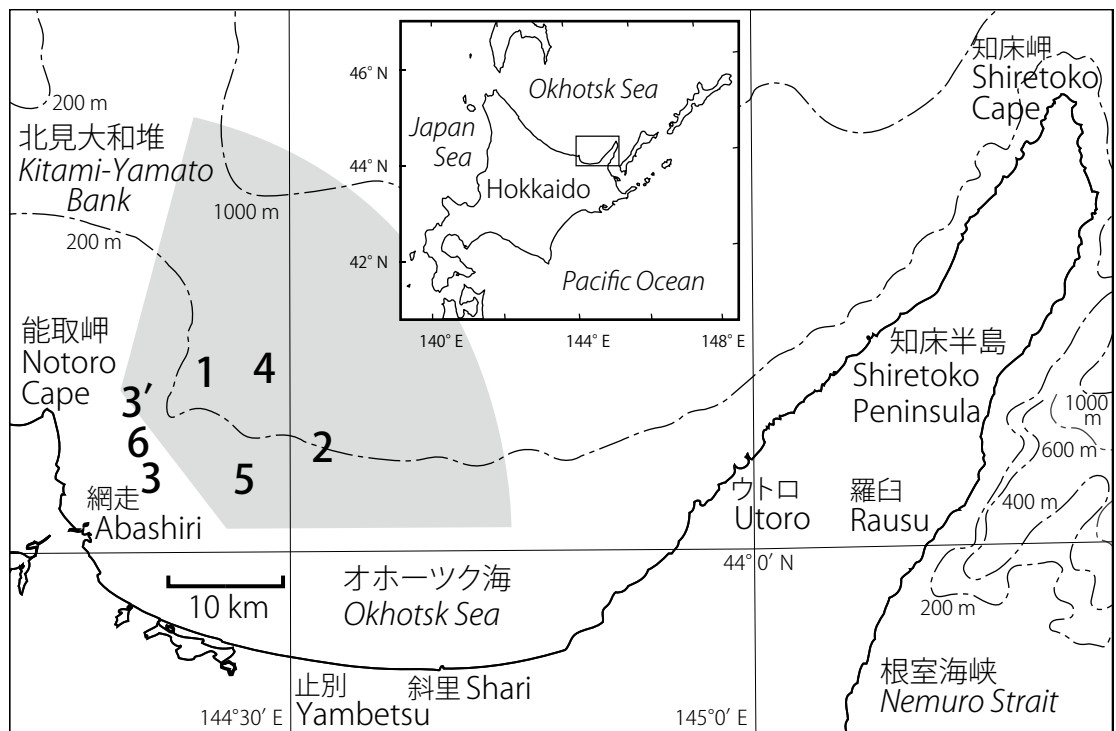


図1. 観察海域(灰色の扇形)と特に記載した鯨類と海鳥類の出現場所. 1: アカボウクジラ科未知名. 2: ナガスクジラ. 3-3': ミンククジラ. 4: ケイマフリ. 5: エトビリカ. 6: アホウドリ. Fig. 1. Cruise area (grey fan) and sighting locations of cetaceans and sea birds. 1: Ziphiidae sp. 2: *Balaenoptera pbsalus*. 3-3': *B. acutorostrata*. 4: *Cephus carbo*. 5: *Lunda cirrhata*. 6: *Phoebastria albatrus*.

9-10月は08:30と13:30, 出発から到着までの所要時間は2時間30分から3時間である. 観察の手順は, 網走川河口から12-13 km (7海里)の観察海域まで時速26-26 kmで巡行し, 観察海域に入った後は時速20-22 kmで探索航行した. 運航の許可は, 網走から北北東に37 km (20海里)から東におなじく37 km (20海里)の扇形の範囲内である(図1). 実際の観察海域は許可範囲のうちの沿岸側半分ほどである. 探索は船室屋根上から7-8倍の双眼鏡を用い, 右舷は著者で船長の前田, 左舷は乗組員が探鯨にあたった. 農大ANCのグループが乗船した場合は, 前田以外の著者や学生が船室屋上で発見に協力した.

鯨類の発見方法は視認によった. ミンククジラやシャチは背びれ, ツチクジラは背中の上, カマイルカやイシイルカはジャンプに伴うしぶき, ネズミイルカは背びれや背中の上によった. 発見後の観察の仕方は動物によって異なり, クジラ類

では発見後すぐに針路や速力を調整して近づく観察航行を行なったが, イルカ類では遠い場合はやりすごす場合もあり, ネズミイルカは観察海域到達以前の沿岸部で発見されることが多く, 一般の乗客の観察が難しいことから観察航行や案内は行われないことが多かった. 鳥類については, 積極的に探すことや観察航行は原則行なわれず, 鯨類の探索途中に航行しながら観察することが多かった. 農大ANCが乗船した場合も航行しながら双眼鏡あるいは肉眼での観察に限られた.

鯨類や海鳥類の出現場所の記録は, 農大ANCのメンバーは撮影データに付加されるカメラのGPSによった. 使用機材はニコンD7000 + 70-300 mmズームレンズおよびD5100 + 18-200 mmズームレンズ, GPS記録装置はニコンGP-1 (WGS 84)である. 観察の文字記録は現場での種判別に加え, 鯨類は観察群ごとの個体数, 鳥類は通常単独や少数で行動する種は発見群の個体数, 群をつ

くる種の場合は発見群のサイズについて、1-9, 10-90, 100-900, 1,000羽以上と桁数で区分けして記録した。記載したGPSの位置データは、正確には個体の出現位置ではなく、数百m以内での撮影場所の記録である。農大ANCのメンバーが乗船しない場合の記録は、船長の前田の文字記録と船舶GPSを利用した。さらに、観察が希な鳥類については、乗船していた他の写真家の写真も観察結果として利用した。

なお、観察鯨類とは観察航行を行なった場合の対象個体とした。よって、船室屋上の探索者が発見しても観察航行にいたらなかった場合は、観察鯨類としては記録しなかった。

2. 観察期間

2012年の運行期間は4月27日から11月30日を予定していたが、実際の航行は4月28日から10月27日までの75日間で運行回数は101回であった。出航の可否は天候や海況に影響を受け、乗船客の有無によっても運行が決まるため平日の運行は少なく、さらに出航後に観察海域まで到達せずに引き返した場合は欠航扱いとなり、乗客の料金は無料とされた。月別の運行日数および回数は、4月は2日間で4回、5月は2日間で2回、6月は7日間で9回、7月は19日間で26回、8月は25日間で34回、9月は16日間で22回、10月は4日間で4回であった。実質的な運航期間は6月4日から10月8日までの4か月間、継続的な運行は6月28日から9月23日までの約3か月間であった。農大ANCのメンバーが乗船した運行は、7月7日から9月21日までで、7月は7日間9回、8月は2日間2回、9月は4日間4回、計13日間15回であった。運行日数と農大ANCのメンバーの乗船が多かった2012年7-9月については、ミンククジラ、カマイルカおよびイシイルカの出現率を算出した。乗船し定期的な運行が行われたなお、海鳥類については運航期間以前にあたる4月6日の観察結果を含めた。

2013年の運行は4月20日から10月31日の予定で行なわれ、実際の運行は4月20日から10月20日であった。

3. 識別方法

観察動物の識別方法は、乗船中の目視あるいは双眼鏡による観察中の判断に加え、類似種が存在する場合は下船後に撮影写真をコンピュータ画面で拡大し、図鑑と照合しながら再確認を行なった。識別が困難な海鳥については、専門家に写真を送って助言を求めた。農大ANCが乗船した運航では自らの撮影写真の元データを用い、農大ANCが乗船しなかった運航では、写真家の記録写真を利用した。これらが得られなかった運航については、網走観光協会が作成している運航日誌の観察記録を利用した。これは運航後に前田の報告により作成されるもので、記載事項のうち鯨類の種や頭数、海鳥類の群れサイズの記録を利用した。しかし写真記録に欠けるため、類似種が存在する場合は種レベルでの識別記録としては利用しなかった。

類似種の判別については、ミンククジラとシャチについては類似種がないため、十分に近づいて観察した場合の誤認はないと判断した。アカボウクジラ科の鯨類は背びれおよび横から見た頭部の形をおもな材料とし、副次的に同種間と思われる歯形やダルマザメの噛み跡を利用した。イルカ類は遊泳時のジャンプの仕方（カマイルカは全身が水面上に出る、イシイルカは背中の一部のみ、ネズミイルカは通常ジャンプしない）、背びれの形などで行なった。海鳥のうちミズナギドリの仲間類似種は、大きさ、頭部や嘴の形状、脚の色彩などから総合的に判断した。

結果

報告の内容は、2012年は観察動物に加えて一部の種の観察頻度を記述し、2013年は前年に見られなかった特別な観察や事象だけを記載した。

1. 鯨類

本調査による観察鯨類は、ナガスクジラ *Balaenoptera physalus*、ミンククジラ *B. acutorostrata*、ツチクジラ *Berardius bairdii*、アカボウクジラ科未記載種 *undescribed Ziphiidae sp.*、シャチ *Orcinus orca*、カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens*、イシ

イルカ *Phocoenoides dalli*, ネズミイルカ *Phocoena phocoena* の4科8種であった。2012年7-9月の運行回数に対する月ごとの出現率は、7月はミンククジラ 38.5%, カマイルカ 19.2%, イシイルカ 76.9%, 8月はミンククジラ 47.1%, カマイルカ 32.4%, イシイルカ 88.2%, 9月はミンククジラ 28.6%, カマイルカ 52.4%, イシイルカ 33.3%, 鯨類全体では7月 88.5%, 8月 94.1%, 9月 81.0% であった。ミンククジラとイシイルカは8月以前, カマイルカは8月以降に多く観察された(表1)。

2012年の鯨類の観察状況は、ヒゲクジラではミンククジラが4月と6-9月に観察された。特殊な行動として、9月2日午前便ではカマイルカに追尾され大きなしぶきをあげて海面近くを泳ぐ姿、観察船の船首のすぐ横で呼吸をする姿が観察された(図2)。この年の観察鯨類のなかの唯一のヒゲクジラであった。ハクジラでは、アカボウクジラ科の鯨類が、6月16日午後、7月7日午後、7月10日午前、9月4日午後の計4日4回観察された。種別ではツチクジラは6月16日午後、アカボウクジラ科未知種が7月7日に網走川河口から北東沖約16

km (44°8'17.26" N, 144°24'17.66" E) で観察された(図1-1, 図3)。7月10日と9月4日は種の判別ができなかった。シャチの観察は2012年は10月7日の5頭の群れ1日に限られた。この群れの構成はオス1頭, メス4頭と判断した。

2012年に観察されたイルカはカマイルカ, イシイルカ, ネズミイルカの3種であった。これはオホーツク海に回遊するイルカ全種に相当する。種別では、カマイルカが7月16日から10月27日まで、イシイルカは6月4日から10月27日、ネズミイルカも6月4日から9月29日までと、初夏から秋にかけて観察され、カマイルカは他のネズミイルカ科の2種よりも群れが大きく、100頭を越える大きな群れが観察された。その初認は8月11日の200頭, 8月20日に300頭, 22日と27日に500頭の群れが現れた(図4, 5)。8月27日の群れは、08:56から09:56までの60分間に東北東方向に約6 km 移動した(起点 44°6'2.01" N, 144°22'42.57" E, 終点 44°4'13.28" N, 144°27'10.95" E)。その後も9月1日300頭, 7日200頭, 12日と13日に400頭, 15日には今期最大となる800頭が観察され、20日に400

表1. 網走沖で2012-13年に観察された鯨類と2012年の1航海あたりの月別観察確率。Table 1. Sighting records of cetaceans off Abashiri, north-eastern Hokkaido in 2012-13 and monthly sighting probabilities per passage in 2012.

科名 Family name			月別観察頻度 (%) Sighting rates per month						
和名 Japanese name	英名 English name	学名 Scientific name	4月 Apr.	5月 May	6月 June	7月 July	8月 Aug.	9月 Sept.	10月 Oct.
鯨類全体	Whole cetaceans	Cetacea	+	+	+	88.5	94.1	81.0	+
ナガスクジラ科 Balaenopteridae									
ナガスクジラ	Fin whale	<i>Balaenoptera physalus</i>		+					
ミンククジラ	Mike whale	<i>Balaenoptera acutorostrata</i>	+	+	+	38.5	47.1	28.6	
アカボウクジラ科 Ziphiidae									
ツチクジラ	Barid's beaked whale	<i>Berardius bairdii</i>			+				
未知種	unclassified beaked whale	Ziphiidae sp.				+			
ツチクジラまたは未知種	Barid's beaked whale or Ziphiidae sp.					+		+	
マイルカ科 Delphinidae									
シャチ	Killer whale	<i>Orcinus orca</i>							+
カマイルカ	Pacific white-sided dolphin	<i>Lagenorhynchus obliquidens</i>				19.2	32.4	52.4	+
ネズミイルカ科 Phocoenidae									
イシイルカ	Dall's porpoise	<i>Phocoenoides dalli</i>			+	76.9	88.2	33.3	+
ネズミイルカ	Habour porpoise	<i>Phocoena phocoena</i>			+	+	+	+	

+ 観察あり。+ occurred.

頭, 21日250頭, 23日150頭が記録された。9月20日は09:06から09:47までの41分間に北北西に約3.7 km, 21日は11時27分から12時09分までの42分間に北北東に約4.8 km 移動した様子が観察された。またカマイルカは, 出現時期も群れの大きさの極値も他のイルカ2種よりも遅い傾向が見られた。ネズミイルカは観察海域に到達する以前に発見されることが多く, その場合は観察航行や乗客への案内は行われず, 農大ANCの乗船時にもほぼ毎回発見されたが記録が不十分であり, 本種に関しては記録上の出現率は実際の発見よりも相当程度低くなっている。

2013年の特記事項はナガスクジラの観察, および沿岸近くでのミンククジラの多数観察であった。ナガスクジラは2013年5月25日の午前便で観察され, 写真では同時に3頭が写り, 観察時の印象では6-10頭程度に感じられた(図1-2)。ナガスクジラの観察は2012-13年の2年間を通してこの1日に限られた。ナガスクジラの出現位置は船舶GPSにより44°07' N, 144°33' Eであった。ミンククジラの沿岸での多数観察は6月8日には15頭以上, ほかに6月22日や7月14日などで10頭前後以上が観察された。観察海域は近いところで網走川河口沖北東5.6 km (44°2'47" N, 144°20'21" E, 2013年7月14日, 図1-3) から北北東7.7 km (44°7'9" N, 144°20'14" E, 2013年6月22日, 図1-3') あたりの海域であった(図6)。このほか, 2013年は5月25日午後にはシャチの群れがオットセイを追い回す姿が観察された。観察場所はナガスクジラの近傍で, 船舶GPSによると44°08' N, 144°23' Eであった。

2. 鰭脚類

観察された鰭脚類は, 2012-13年を通して, アシカ科がオットセイ *Callorhinus ursinus*, アザラシ科はゴマフアザラシ *Phoca largha* の2種のみであった。2012年の観察は, 4月28日午前便のゴマフアザラシの数10頭の群れ, および6月8日午前便で観察されたオットセイ1頭に限られた。4月28日の運航では能取岬沿岸の岩礁に上陸するゴマフアザラシの観察を試験的に行なったが, 観察船を近



図2. ミンククジラ. 2012年9月2日. Fig. 2. A minke whale *Balaenoptera acutorostrata*. Sept. 2, 2012.



図3. アカボウクジラ科未記載種の群れ. 網走の捕鯨業者が「クロツチ」と呼んできた種と思われる. 2012年7月7日, 長嶋大生撮影. 図1-1. Fig. 3. A school of unclassified Ziphiidae sp. They are likely to be the so-called "Kurotsuchi"[Black Baired's beaked whale] by small type whalers in Abashiri. July 7, 2012. photograph by NAGASHIMA Daiki. Fig. 1-1.



図4. ジャンプするカマイルカ. 2012年8月27日. Fig. 4. A leaping pacific white-sided dolphin *Lagenorhynchus obliquidens*. Aug. 27, 2012.

づけると上陸していたアザラシが全頭海中に降りてしまった。ウニ漁の船外機船が近くで操業して



図5. カマイルカの大群. 推定500頭. 左から右へと一直線に移動中. 2012年8月27日. Fig. 5. A large school of Pacific white-sided dolphins *Lagenorhynchus obliquidens*. About 500 dolphins, swimming from left to right. Aug. 27, 2012.



図6. 網走川河口から5.6 km沖のミンククジラ. 2013年7月14日. 図1-3. Fig. 6. A minke whale *Balaenoptera acutorostrata*, 5.6 km off the mouth of Abashiri River. July 14, 2013. Fig. 1-3.

いても上陸を続けるが、初めて現れた観察船には驚いたと思われ、この経験をもって当年度に予定していた春先のアザラシ観察は以降中止された。

2013年についてはオットセイが前年よりも観察が多く、5月5日午前、5月25日午後、10月19日午後などで観察された。このなかで5月25日午後便では、オットセイがシャチに追回される様子が間近で観察された。このオットセイは観察船の舷側に胸びれを叩きつけて船によじ登ろうとする様子が観察された。

3. 海鳥類

鳥類のうち、記録対象としたのは陸上や海岸で見ることが少ない、いわゆる海鳥類に限定した。具体的には、アビ科、ウミスズメ科、ミズナギドリ科、ウミツバメ科、トウゾクカモメ科、カモメ科の一部（ミツユビカモメとアジサシ類）、ヒレアシシギ科の鳥類で、この範囲で観察された鳥類は以下の7科11属19種である。シロエリオオハ

ム *Gavia pacifica*, ハシブトウミガラス *Uria lomvia*, ケイマフリ *Cepphus carbo*, ウミバト *C. columba*, ウトウ *Cerorhinca monocerata*, エトピリカ *Lunda cirrhata*, フルマカモメ *Fulmarus glacialis*, ハイロミズナギドリ *Puffinus griseus*, アカアシミズナギドリ *P. carneipes*, ハシボソミズナギドリ *P. tenuirostris*, アホウドリ *Phoebastria albatrus*, ハイイロウミツバメ *Oceanodroma furcata*, コシジロウミツバメ *O. leunorhoa*, トウゾクカモメ *Stercorarius pomarinus*, ミツユビカモメ *Larus tridactylus*, コシジロアジサシ *Sterna aleutica*, アジサシ *S. hirundo*, アカエリヒレアシシギ *Phalaropus lobatus* およびハイイロヒレアシシギ *P. fulvicarius* であった (表2)。

以下の記録は断りのない限り2012年のものである。アビ科はシロエリオオハムが10月7日に観察された。ウミスズメ科で継続して観察されたのはウトウに限られ、4月6日から9月29日まで毎月観察され、6-9月はほぼ毎回出現した。ハシブトウミガラスは4月6日の1日、ケイマフリは8月27日午前と28日午前、および10月8日に現れた。8月27日の出現位置は網走川河口の東北東沖14 kmである (44°3'36.23" N, 144°26'56.38" E, 図1-4)。ウミバトは10月18日に18羽の群れが撮影された。エトピリカは成鳥1羽が7月17日と22日に記録された。7月22日の出現位置は網走川河口の北東沖約19 kmである (44°8'44.82" N, 144°27'54.62" E, 図1-5, 図7)。ミズナギドリ科ではフルマカモメが6月16日から8月28日まで観察され、7-8月はほぼ毎回出現した。ハイロミズナギドリはハシボソミズナギドリとの識別が困難で、はっきりと識別された鳥は6月28日、7月21日、8月25日に観察された。アカアシミズナギドリの確実な記録は8月27日と10月8日に限られ、一群が10羽を越えるこ



図5. 続き. Fig. 5. Continued.

とはなかった。ハシボソミズナギドリは4月29日 から9月21日まで5月を除き毎月ほぼ毎回出現した。おもにハシボソミズナギドリからなるミズナギドリ類の1,000羽を越える大群は、6月8日、16日、23日、24日、7月17日、21日、24日、8月11日、12日、9月20日に観察された。ウミツバメ科

表2. 網走沖で2012-13年に観察された海鳥類と2012年の月別観察頻度. Table 2. Sea birds observed off Abashiri, north-eastern Hokkaido in 2012-13 and sighting rates per month in 2012.

科名 Family name			月別観察頻度 Sighting rates per month						
和名 Japanese name	英名 English name	学名 Scientific name	4月 Apr.	5月 May	6月 June	7月 July	8月 Aug.	9月 Sept.	10月 Oct.
アビ科 Gaviidae									
シロエリオオハム	Pacific loon	<i>Gavia pacifica</i>							+
ウミスズメ科 Alcidae									
ハシブトウミガラス	Thick-billed murre	<i>Uria lomvia</i>	+						
ケイマフリ	Spectacled guillemot	<i>Cepphus carbo</i>					+		+
ウミバト	Pigeon guillemot	<i>Cepphus columba</i>							+
ウトウ	Rhinoceros auklet	<i>Cerorhinca monocerata</i>	++	++	+++	+++	+++	+++	
エトビリカ	Tufted puffin	<i>Lunda cirrhata</i>				+			
ミズナギドリ科 Procellariidae									
フルマカモメ	Northern fulmar	<i>Fulmarus glacialis</i>			++		+++		
アホウドリ	Short-tailed Albatross	<i>Phoebastria albatrus</i>			+				
ハイイロミズナギドリ	Sooty shearwater	<i>Puffinus griseus</i>			+	+	+		
アカアシミズナギドリ	Flesh-footed shearwater	<i>Puffinus carneipes</i>					++	++	++
ハシボソミズナギドリ	Short-tailed shearwater	<i>Puffinus tenuirostris</i>	+		+++	+++	+++	+++	
ウミツバメ科 Hydrobatidae									
ハイイロウミツバメ	Fork-tailed storm petrel	<i>Oceanodroma furcata</i>				++	++	++	
コシジロウミツバメ	Leach's storm petrel	<i>Oceanodroma leunorhoa</i>				+			
トウゾクカモメ科 Stercorariidae									
トウゾクカモメ	Pomarine jaeger	<i>Stercorarius pomarinus</i>				++	++	++	++
カモメ科 Laridae									
ミツユビカモメ	Black-legged kittiwake	<i>Larus tridactylus</i>							+
コシジロアジサシ	Aleutian tern	<i>Sterna aleutica</i>					+		
アジサシ	Common tern	<i>Sterna hirundo</i>					++	++	++
ヒレアシシギ科 Phalaropodidae									
アカエリヒレアシシギ	Northern phalarope	<i>Phalaropus lobatus</i>		+	+++	+++	+++	+++	
ハイイロヒレアシシギ	Red phalarope	<i>Phalaropus fulicarius</i>		+					

観察頻度 + まれ, ++ 普通, +++ ほぼ毎回. Sighting rate + rare, ++ common, +++ most time.



図7. エトピリカ成鳥, 2012年7月22日, 図1-5, Fig. 7. An adults tufted puffin *Lunda cirrhata*. July 22, 2012. Fig. 1-5.



図8. アホウドリ幼鳥, 2013年6月13日, 図1-6, Fig. 8. A juvenile albatross *Phoebastria albatrus*. June 13, 2013. Fig. 1-6.

ではハイイロウミツバメが7月10日から9月8日まで散発的に記録され, コシジロウミツバメは成鳥1羽が7月21日に見られた。トウゾクカモメ科はトウゾクカモメのみの観察で, 7月7日から10月8日まで毎月ほぼ毎回観察された。カモメ科は10月8日と27日にミツビカモメ観察され, コシジロアジサシは成鳥1羽が8月25日に, アジサシは8月25日から10月8日まで観察された。アカエリヒレアシギは6月8日から9月21日まで毎月ほぼ毎回観察された。群サイズは数羽から10数羽が多かった。

2013年の特記事項としては, ハイイロヒレアシギが2013年5月19日午後, そしてアホウドリ幼鳥1羽が2013年6月13日午後便で観察されたことである。アホウドリの出現位置は網走川河口の北東沖6.6 kmであった (44°4'31" N, 144°18'49" E, 図1-6, 図8)。

考察

1. アカボウクジラ科未知種

網走の小型捕鯨業者はツチクジラを2つに区別し, 大きいものを「アカツチ」, 小型のものを「カラス」あるいは「クロツチ」とよんできた。クロツチについて, 西脇 (1965) はキタトックリクジラ *Hyperoodon ampullatus* とし, ツチクジラは「オホーツク海でかなり捕獲されるが, これには2群あるように思われる。すなわち4-6月ごろに見られる群と, 9-10月に見られる群とがあるが, 9-10月に

見られるものが本種であって, 4-6月に見られるものは, おそらくキタトックリクジラであろうと思われる」(西脇1965), 「オホーツク海でツチクジラとして捕獲されているもののうち, 体長7.6 m以下で妊娠しているものは, おそらく本種であろう」と述べている (西脇1965)。西脇はその根拠となる資料には言及していない。標本は残されていないが, 1968年6月に網走船籍の小型捕鯨船によって網走北東沖23マイル付近で21-23尺 (6.3-6.9 m) の個体1頭 (小清水町止別沖) が捕獲されたという (福岡昇三私信)。ただし, クロツチの呼称は, ツチクジラ *Berardius bairdii* の小型個体についても用いられることがあるらしく「1988年に粕谷が業者の協力を得て捕鯨活動の中でそれを捕獲したが, 獲られたものは若いツチクジラであった」という (粕谷・山田1995)。しかしながら, ツチクジラとは異なる小型の鯨類は, 21世紀になって座礁や漂着の事例が得られるようになり, オホーツク海では2008年6月に北見市常呂町にオス成獣, 翌2009年6月には斜里町でメス成獣, 2012年11月に猿払村でオス成獣などが記録され, 標本が回収されている (山田格 (監), 海棲哺乳類情報データベース, 国立科学博物館, <http://svrsh1.kahaku.go.jp/marmam/?s=種不明アカボウクジラ科>, 2013年12月閲覧)。この鯨類は根室海峡では2000年代後半には観察船からしばしば観察され, 2004年7月に成獣と新生児の混獲があり (佐藤晴子私信), 2009年5月にはツチクジラの新生児とは形態的に異な

る新生児の頭部が見つかった(山田・田島2010)。これらのことからクロツチと呼ばれてきたものに相当すると考えられる別種のクジラの存在は確実となっている。

網走の小型捕鯨業者が語るクロツチの特徴は、群サイズが5-6頭、長時間浮上して呼吸する「流れている」状態が少ない、「こすい」(ずる賢しくくすばしっこい)、すぐに潜水してしまう、小型なのでそもそも捕獲対象としない、などであった(福岡昇三より聞き取り、2009年8月18日)。近年の漂着状況を見ても、サケ定置網など大型定置網「大謀(だいぼう)」に混獲されるなどツチクジラには見られない特徴がある。このような観察から、クロツチはツチクジラよりも群れサイズが小さく、浅い海域を利用する傾向があると想像される。今回観察されたアカボウクジラ科未知種も4-5頭の群れであり、ツチクジラが通常10頭前後以上の群れで観察されることに比較して小さい群れであった。

本調査ではツチクジラが6月16日、アカボウクジラ科未知種は7月7日に観察されており、少なくとも網走の沖合では、西脇(1965)が述べたような季節的な交代は見られず、アカボウクジラ科未知種とツチクジラとは同一海域を7月の同時期に利用していることが明らかとなった。

網走からの目視観察の対象としてきわめて興味深いクジラであるが、通常の営業運航では、沿岸での観察や運行時間の制限から本種の観察海域にまで到達することが困難である。季節回遊や形態や行動の観察など本種を目的とした目視調査が望まれる。

2. ミンククジラの沿岸での鯨類

2013年はミンククジラが網走から能取岬の沖合5-8 kmで多数観察された。また頭数も大きく、1回の運行で、6月8日には15頭以上、ほかにも6月22日や7月14日などで10頭前後以上の観察があった。この沿岸海域でのミンククジラの集中は2012年には観察されず、1987年以前のミンククジラを対象とした小型捕鯨の操業時でも、これほどの集中は見られなかったほどの頭数であった。本

調査は観察調査のため、網走沿岸にミンククジラが集まった原因は不明であるが、水温や餌などの要因があったものと想像される。

3. 観察が期待される鯨類と海鳥

鯨類を対象にしたオホーツク海南部での目視調査は、日本鯨類研究所の北西太平洋捕獲調査(JARPN)によって実施されている。同調査は対象海域全体をいくつかの調査区に分け、オホーツク海南部の北海道沿岸に近い海域は11海域と名付けられ、実際の調査海域は宗谷岬から北緯45度と東経145度の交点をとおり知床岬に至る範囲であった。JARPNの調査は対象海域をジグザグに航行するライントランセクト法で行われ、その一部は本論の調査範囲と重なっているが、ほとんどはより沖合を対象にしている(Fujise 2000)。目視調査は1996年8月15-22日および1999年7月6-15日に実施され、1996年はミンククジラ、ツチクジラ、種不明アカボウクジラ科、シャチ、カマイルカ、イシイルカ(イシイルカ型および型不明個体)が(Fujise et al. 1997)、1999年はミンククジラ、ナガスクジラ、イワシクジラ、マッコウクジラ、ツチクジラ、種不明アカボウクジラ科、シャチ、カマイルカ、イシイルカ(イシイルカ型および型不明個体)が観察された(Fujise et al. 2000)。JARPNの調査では、網走からの観察事業では見られなかったイワシクジラやマッコウクジラ、1日の観察に限られたナガスクジラといった大型種が観察されている。あばしりネイチャークルーズでもより沖合で観察を実施することで、これらの大型種の観察可能性が高まることが期待される。

海鳥類については、断片的な記録から出現可能性のある種を推定すると、シロハラトウゾクカモメが1995年8月2日に止別川河口で1羽(川崎1997)、1998年6月に小清水町止別沖数kmの海域をシーカヤックで航行中に数羽が観察され(宇仁未発表)、1999年9月5日に幼鳥1羽が斜里市街地で保護されている(川崎2001)。また川崎(1997)によると、小清水町止別海岸において日本で見られるトウゾクカモメ類4種(オオトウゾクカモメ、シロハラトウゾクカモメ、トウゾクカモメ、ク

ロトウゾクカモメ) 全てが観察されている (川崎 1997)。また農大ANCメンバーによって、2012年5月4日に網走港でヒメウ成鳥夏羽1羽が観察されている。これらが網走沖での観察が期待される海鳥である。

4. 稀少鳥類と季節傾向

あくまで日本の本土沿岸での観察がまれという意味であるが、エトピリカ、アホウドリ、コシジロアジサシなど極めてまれな鳥類が出現した。今回の観察でエトピリカが観察されたのは2012年7月17日と22日の2回各1羽で、北海道のオホーツク海沿岸での夏季の観察は本報告が初めてと思われる。知床半島沿岸では、羅臼沖の根室海峡で2006年8月21日に知床岬赤岩で1羽 (宇仁未発表)、2008年6月13日から7月12日までの5日間に各1羽 (佐藤ら2009)、2010年5-7月に4群4羽が観察されている (佐藤・長谷川2011)。いずれも少数であるが、将来の知床半島への定着を期待したい。アホウドリの観察は2013年6月13日の1日であったが、北海道のオホーツク海沿岸での観察は季節を問わず本報告が初めてと思われる。根室海峡では2007年6-8月 (佐藤ら2008)、2008年7月と11月 (佐藤ら2009)、2010年7月と10月に記録され (佐藤・長谷川2011)、根室海峡では少数ながら定期的な飛来があると推定される。網走沖では沖合底引き船の乗組員がアホウドリをしばしば観察しているという情報もあり、今後の調査が待たれる。コシジロアジサシは成鳥1羽が8月25日記録され、これも北海道のオホーツク地方では初認と思われる。

観察鳥類のなかで特に注意すべき種にケイマフリがある。知床半島の一部で繁殖し、沿岸海上調査では1998年7月18日に154羽 (福田2002)、2004年7月9日に148羽がカウントされ (福田2005)、同地での巣立ちの時期は8月上旬と推定されている (福田・甲村2011)。よって、知床半島での生息数は巣立ちヒナを除いて150羽程度と考えられる。知床の繁殖個体の行動範囲は未知のままであるが、今回の観察事業によって網走沖合にまで飛来することが明かとなり、この海域を含めて漁具

への混獲の回避などの保全対策が求められる。

おわりに

北海道で海獣や海鳥を対象にした定期的な観察船は2000-03年には6つあり、噴火湾、厚岸湾、野付湾、根室海峡標津沿岸、根室海峡羅臼沿岸、知床半島ウトロ側で運航されていた。このうち北海道 (道東) では5事業が営業し、うち厚岸湾と野付湾は鯨類ではなくアザラシのみを対象にしていた (宇仁2004)。2013年現在では、鯨類や海鳥を対象とした観察船は、知床だけで9事業者が存在し、ウトロ側で5事業者、羅臼でおなじく5事業者が運航している (1事業者はウトロと羅臼の両方で運航)。道東全体での観察船は、出港地は網走、ウトロ、羅臼、尾岱沼、厚岸の計5か所、12事業者が運航していることになる。10年前に比べると、事業者数で倍増以上、乗客数の統計はないが、それ以上の増加となるのは確実である。

これらの事業者のうち、鯨類をおもな観察対象にしているのは、網走と羅臼の事業である。根室海峡の観察状況は、(有)知床ネイチャークルーズの観察船「エバグリーン」による2006-13年の観察結果が年ごとに月別で報告されている (知床ネイチャークルーズ (2006-10は佐藤晴子)、エバグリーンの航海実績と主な動物の発見率2006-2013、知床ネイチャークルーズ、<http://www.e-shiretoko.com/hakkenritu2006-2010.htm>, 2013年12月23日閲覧)。これとの比較では、網走は、マッコウクジラがまったく見られないこと、シャチの出現頻度や観察頭数が少ない一方、逆にカマイルカの出現頻度は格段に高いことがわかる。とりわけ数百頭規模のカマイルカの群れは、今のところ網走沖でのみ観察可能な光景である。女満別空港からのアクセスの良さ、市街地に隣接した道の駅での乗船、夏季の良好な天候などの好条件に恵まれ、近年の流水の傾向からすれば、海明け頃の3月の観察運航も可能と思われ、観察事業としての魅力はさらに拡大可能と思われる。

網走沖の海域では、鯨類や鰭脚類、海鳥についての調査はこれまでほとんど行われてこなかったが、あばしりネイチャークルーズの観察事業から、

他では見られない観察対象が存在することが明らかとなった。さらに、知床世界遺産の緩衝地帯として、海の生物多様性の保全に向けた基礎資料の蓄積が望まれる。

謝辞

乗船調査では網走観光協会の方々に大変お世話になりました。「クロツチ」の捕獲や観察について教えて下さった福岡昇三様、佐藤晴子様、鳥類の識別や出現状況に助言くださった日本野鳥の会オホーツク支部長の川崎康弘様、JARPNの報告を貸して下さった下関海洋科学アカデミー鯨類室長の石川創博士、調査を一緒におこなった農大ANCメンバー、井内衛、植村まどか、岡田樹、長嶋大生の諸君に感謝します。

引用文献

Fujise Y. 2000. Outline of the research activities of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the North Pacific (JARPN) from 1994 to 1999. SC/F2K/J8. 30 pp. presented to the Workshop to Review the Japanese Whale Research Programme under Special Permit for North Pacific Minke Whales (JARPN), February 2000. (unpublished, <http://www.icrwhale.org/pdf/SC-F2K-J8.pdf>)

Fujise Y., Shimada H., Zenitani R., Goto M., Tamura T., Lindström U., Uchijida A., Yoshida H., Shimamoto K., Yuzu S., Kasai H., Kinoshita T., Iwata T. and Tohyama D. 1997. Cruise report of the Japanese Whale Research Program under a special permit in the North Pacific (JARPN) in 1996 with some preliminary analyses of data collected during the 1994–1996 JARPN surveys. SC/49/NP8. 38 pp. presented to the IWC Scientific Committee, September 1997. (unpublished, <http://www.icrwhale.org/pdf/SC-49-NP8.pdf>)

Fujise Y., Zenitani R., Tamura T., Banco T., Ohtani S., Takeda S., Kitajima A., Kimura T., Masaki T., and Tohyama D. 2000. Cruise report of the Japanese Whale Research Program under a special permit in the North Pacific (JARPN) in 1999. SC/F2K/J9.

32 pp. presented to the Workshop to Review the Japanese Whale Research Programme under Special Permit for North Pacific Minke Whales (JARPN), February 2000. (unpublished, <http://www.icrwhale.org/pdf/SC-F2K-J9.pdf>)

福田佳弘. 2002. 知床半島斜里町側における海鳥の夏期間の海上分布1997・1998年. 知床博物館研究報告23: 51–58.

福田佳弘. 2005. 知床半島における海鳥類の繁殖分布モニタリング調査1997–2004年. 知床博物館研究報告, 26: 21–24.

福田佳弘・甲村真理. 2011. 2010年の知床半島斜里町側における海上ラインセンサスによる海鳥の記録. 知床博物館研究報告33: 51–59.

粕谷俊雄・山田格. 1995. 日本鯨類目録. 鯨研叢書7. 90 pp. 日本鯨類研究所, 東京.

川崎康弘. 1997. 網走市・小清水町・斜里町におけるオホーツク海沿岸部周辺の鳥類. 知床博物館研究報告18: 19–34.

川崎康弘. 2001. 網走支庁管内鳥類目録: 北海道・オホーツク圏で確認された鳥類. 知床博物館研究報告22: 55–68.

西脇昌治. 1965. 鯨類・鰭脚類. 439 pp. 東京大学出版会, 東京.

佐藤晴子・石井輝章・長谷川正人. 2009. 2008年夏季の根室海峡におけるエトピリカ *Lunda cirrhata* およびアホウドリ科 *Diomedidae* 3種の出現記録. 知床博物館研究報告30: 83–88.

佐藤晴子・田澤道広・長谷川正人. 2008. 知床・根室海峡におけるアホウドリ *Diomedea albatrus* の確実な初の連続目視記録. 知床博物館研究報告29: 11–15.

佐藤晴子・長谷川正人. 2011. 2010年の知床・根室海峡における稀な海鳥6種の記録. 知床博物館研究報告33: 43–49.

宇仁義和. 2004. 北海道の海獣観察プログラムの現状と課題. 知床博物館研究報告25: 1–6.

宇仁義和. 2006. 知床周辺海域の鯨類. 知床博物館研究報告27: 37–46.

宇仁義和. 2009. 海生ほ乳類の現状と課題. 斜里町立知床博物館(編), 知床の自然保護. しれと

- こライブラリー 10, pp. 118-141, 北海道新聞社, 札幌.
- 山田格・田島木綿子(監), 2010. 大哺乳類展: 海のなかまたち, 183 pp. 朝日新聞社, 東京.